

う

つ

作者さんや読み手さんの声は
<http://www.columnland.net/> にてどうぞ

危機感

板書を写すよりも、

友達のレポートとかを

写す方が多い気がする最近、

超つとやばいかな…（笑）

現地時間二〇〇八年十月三十一日、米国南部サウスカロライナ州の町で悲劇はふたたび起こった。ハロウィンイベントの帰りに、明かりのついてた家にお菓子をもたらおうと訪問した兄弟と父が、その家の住人に撃たれて兄が死亡したのだ。

この事件のニュースを聞いたとき、私はあまりにも似た十六年前の事件のことを思い出した。一九九二年十月十七日(現地時間)、交換留学生として米国南部ルイジアナ州のバトンルージュ市に来ていた名古屋市の県立高校生、服部剛史君(当時一六歳)が、ハロウィンパーティーを開く友人宅と間違えて訪れた家の住人に射殺されたという事件である。当時私は四歳であったが、幼いながら世間を騒然とさせたニュースであったことは覚えている。だがそれ以上に、私は服部君が通っていたのと同じ高校の出身ということが、よりその記憶を鮮明にさせているのだろう。そこで、問題提起の意味も含めてこれらに触れつつ私の考えを述べてみようと思う。

世間を騒がせた事件も、十六年の歳月が経った今では人々の記憶からはほとんど消えてしまっているが、服部君の両親は今でも米国の銃規制を訴える活動を続けているという。しかし、米国で銃規制を日本のように厳格化するのはほぼ不可能と言えるだろう。実際、販売や輸入等を規制する法律ができた時期があったが現在では失効し、州の条例レベルでの規制しか存在しない。ここには合衆国憲法修正条項第2条で「武器を所持・携帯する権利」が保障されているということだけでなく、そもそも日本人とアメリカ人では文化的背景が大きく異なるために、日本人の「銃社会が問題なら銃を規制すればよい」という考えが通用しないという根本的な原因もあるのだが、それ以上に大きな要因となっているのが「全米ライフル協会(NRA)」の存在である。NRAは一八七一年に設立され、以来合衆国憲法修正条項第2条を根拠にさまざまな銃規制運動に反対するとともに、その資金力で政界にも大きな影響を及ぼしている団体で、銃規制賛成派にとって大きな障害となっている。

銃規制賛成派が大半を占める日本人の目線からすればNRAは大いなる敵だが、そのスローガンは「人を殺すのは人であって銃ではない」というなかなか正論のように聞こえるものだ。しかし私はここに逆説的に人間の本质が隠れているように思える。つまり、人を殺すような人にしたのは銃である」という、人間の心理的な側面である。

人間という生き物は、他人より優れた力を手に入れたとしても気が大きくなり、使ってみたくなる生き物である。より強い力を持つものは、それを扱うにあたりリスクの管理の責任というものが必然的に発生するが、気が大きくなることによってそれらの管理に若干の油断を生じやすくなってしまふ。言い換えれば、力の行使がもたらす結果を軽視して行動に移するということだ。たとえば銃について例をあげてみると、銃を所持していなかったときには人を殺すことを思いとどまるような人間も、引き金を引くだけで相手を殺すことができる銃という強力な力を手に入れると、それまで思いとどまっていたような状況でも引き金を引いてしまいかねないのである。結果として、それらの脅威に備えるために次第に多くの人が銃を所持する結果に至るのだ。

この人間の本質は、人間個人だけでなく、その集合体である組織、さらに大きなスケールでは国家というものにまでみられる。国家というスケールになると、銃ではなく軍隊や核兵器といったものになるが、同じ関係がみられる。強力な軍事力をもつA国に対抗するためにB国は武装し、それを脅威に感じたA国がさらに武装を強化する・・・といった繰り返し、世界のあちこちで現実に取り、武力の行使すらも発生しているのではない。

そう考えると、個人でも国家でも、強力な力を得るということははつねに自身に対しても同等の脅威を生み出す結果につながるのである。だとすれば、いっそ世界全体が丸腰になるというのが、本当の平和なのかもしれない。むしろそれは単なる理想であり、私個人が率先して丸腰になったところでどうしようもないのだが、コスタリカ等軍隊のない国が意外に多く存在していることを考えると、理想を理想のまま終わらせてしまうのはひどく勿体ないようなように思えるのは私だけなのだろうか。

父はうつ、だから僕はうつ

僕は一年ほど前から点字を打つようになった。それは僕の父が昨年視野を失ったからだ。

僕の父は十年くらい前に緑内障と診断された。緑内障は視野が欠けていくなどの症状を引き起こす目の病気だが、まだ治療法が確立されておらず病気の進行を抑えるのが精一杯なのが現実である。

父の視野は年毎に狭くなり、昔とった大型免許も返還したし、夜道も一人で歩けなくなった。

そして昨年、点眼や通院の甲斐なく失明が診断された。五十年以上の間、当前のように見てきたものが見えなくなったショックは大きかったのだろう、失明とほぼ同時にうつ状態になってしまった。

父の失明が近づいた頃から僕はなるべく父の側にいるようにした。今更とは思いながらもこれが、視野が残っている間にできる精一杯の親孝行だと思った。父親もそれを分かってか色々な話をしてきた。二度三度聞いた覚えのある話も多かったが真面目に耳を傾けた。父の目を見ながら。

そして父が失明してから前にまして父親に話しかけた。力なく椅子に座っている父に僕はその日あったことを毎日話した。少しでも元氣を出してほしかったが、うつ状態は長く続いた。僕はもちろん父の失明にはショックを受けたが、鬱陶しいくらいに騒々しかった父がうつになったことにも驚きを隠せなかった。

また、僕は点字器を購入し家中のものに点字シールを貼った。「さとう」「しお」など父親が少しでも生活しやすいように努力した。が、当の父親が失明からくるストレスやうつ状態が原因で中々点字を覚えようとしてくれなかった。幼児なら盲学校などもあるが、五十を過ぎてからの失明ではどうしても父親の努力によってしまう。この時の父は未だに無気力状態で点字どころではなかった。

ニュースでも介護者のストレスの話題は出るが、僕もこの時始めて介護のストレスを感じた。

「やってあげている」などのような気持ちは持つてはいけなさと分かっているが、それでも父親のために尽くしている自分と、うつ状態で無気力な父はすれ違う一方だった。

それから父は相変わらず退屈そうに座ったり寝たりする生活を続けたが、ある日突然、すこし点字をやってみる、と言い出した。僕は一瞬戸惑ったが、妙に嬉しい気持ちになった。一回一回はすぐ投げ出してしまうものも、それでも父は毎日見えない指先で僕の打つ点をなぞった。

それから点字や白い杖を練習することにより父親の世界も広がったし、何よりうつ状態が少しずつ回復していることが嬉しくて仕方なかった。そして今ではポケットから僕の打った点字を出して、「これがお父さんのお守りだよ」などと言って笑っている。

僕が照れていると、見えなくても分かるのは流石父親といったところだろうか。

食物連鎖？

ある日、僕はうつそうとした森の中に
迷いこんでしまった。

すると、奥の方からかすかにウツ、ウツ……という泣き声が聞こえてきた。

おそろおそろ声のする方に向かっていると、ウツボカズラ（※食虫植物の一種）が一つ生えていた。どうやらこの声の主らしい。

ウツボカズラ君に訳を尋ねると、彼は鬱々とした口調で言った。

ウツボ「最近、この森に獵師が来て、動物たちを撃って、その毛皮を売ってしまふんだ……私はここを動くことができないから、何もできなくて……ウツ……」

僕「そっか……じゃあ、僕がみんなの敵を討つよ！」

ウツボ「そうか、ありがとう！」

僕「（って言っても、説得して他の森に拠点移してもらっただけけど……）」

だって、獵師さんもお仕事やめるわけにはいかないもんね。

説得は成功し、この森に平和が戻った……かのように思われた。

後日、またウツ、ウツ……という泣き声が聞こえてきた。

ハエ君だった。

ハエ「最近、僕の仲間が激減しているんだ！」

僕「何？！」

そのとき、僕の瞳は、例のウツボカズラが、ハエを一匹食らう瞬間を映した。

僕「自分のことは棚上げかい！」

食物連鎖のむなしさを感じつつ、僕は思わずウツボカズラ君の頭（？）を打った。

この、うつけもの――

歴史上「うつけもの」と呼ばれた人物を思い出そうとしても、それほど多くはいないだろう。特に、日本に限って言えば、誰もが第一に彼の名を挙げるはずだ。

『長身、瘦軀で髭は少ない。声は甲高く、武技を好み、粗野。正義や慈悲の行いを好み、傲慢で名誉を尊ぶ。決断力、戦術に優れるが規律を守らず、部下の進言に従う事は殆ど無い。人々からは異常なほどの畏敬を受けている。酒は飲まない。自分をへりくだることは殆ど無く、人と語るときには遠回しな言い方を嫌う。自分以外の大名の殆どを軽蔑しており、まるで部下のごとく語る。理解力、明晰な判断力に優れ、神仏など偶像を軽視し、占いは一切信じない。名義上法華宗ということになっているが、死後の世界なども有りはしないと明言している。その事業は完全かつ功名を極めている』

これは戦国時代に日本に宣教師として訪れたルイス・フロイスの言である。青年期に「尾張の大うつけ」と揶揄された稀代の戦国武将、織田信長の人物像を語る上で、先の文章は重要な情報を多々含む。そもそも彼が「大うつけ」と呼ばれた所以は何だったのだろうか。逸話を此処で紹介しているとキリが無いので簡単に済ませるが、日頃から下品な行動をとったり、葬儀で焼香を仏前にぶちまけたりと、他人から見ても奇怪に写る行動が多かったようである。フロイスの言葉の中でも「粗野である。大名を軽蔑している。神仏を軽視する」と、外から見れば「大うつけ」と見られて可笑しくない点が幾つか見当たった。

その一方で、彼が戦国の世で大事業を為した事を我々は知っている。この相反する二つの事実は、単純に考えれば「馬鹿と天才は紙一重」という一言で済ませる事が出来るが、この大人物に対してそれだけの評価と言うのは幾ら何でも失礼に値するため、もう少し考察を続けることにしよう。

再びフロイスの言葉を見て欲しい。フロイスの言葉から読み取れる信長の性格を、ただ一言で表すならば、自己中心的という言葉が最も相応しいと思える。それも単なる自己中心ではない。他の大名はおろか、神仏、部下、そして規律に至るまで、自身のその時の判断に比べれば取るに足らないという考えを、この男は持っている。この極めて異常な自己中心性こそ、彼が「大うつけ」でありながら世に多大な影響を与えるまでに活躍した原動力だと私は思う。次の言葉を見て欲しい。

『絶対王政は、その権力を持つ王が、全ての判断を間違わないのなら、最も理想的な政治体系である』

この文を見てどのように感じるだろうか。これはあくまでも仮定であり「全ての判断を間違わない」などということは有り得ない（そもそも何が間違いないのか判らない場合もある）。しかし、この仮定の下では絶対王政は国を良い方向へ導くと言うのも事実である。

私は、信長は正にこの言葉に当て嵌まるのではないかと考える。フロイスの言葉にも有るとおり、信長は判断力に長けていた。その上で、神仏、部下、規律などの意見を切り捨てるべき所で切り捨てる決断力にも秀でていたため、天下にその名を馳せるに至ったのであろう。

自身の考えに全く過ちが無いなどと信じるものは「大うつけ」であると、私は思う。

だが、戦国武将織田信長に関しては、その「大うつけ」である事こそが天下へ導いたと言える。

反則？

やっぱりここは戦場だぜ。

九回裏ツーアウト満塁。ここで打たれたら確実に負ける。しかも相手は四番バッター。これはかなり絶望的な状況だ。だが、俺は決してあきらめない。この試合に勝つために薬まで使ったのだ、ここで負けるわけにはいかない。

卑怯者だと罵られても構わない。俺はこの試合に勝ちさえすればいいんだ。しかし相手チームはなかなかの強豪だ。わざわざ苦勞して手に入れた薬を使ってもこの状況だ。

……よし、この一球ですべてを終わらせる。いざ勝負！

ボールを構え振るかぶった瞬間、不意に体を眠気が襲う。

「え…」

崩れていく体を立て直す暇もなく、ボールがゆつくりと放たれた。目の前を暗闇が襲い、次第に意識が薄れていく…

鋭い金属音が球場に響き渡った。

†

「おいっ、起きろ！」

「く…」

「お前が絶対大丈夫って言うから信用したのになんだあの有様は。」

「あれ〜？おかしいな〜ちゃんと薬を飲んできたのに。」

「おまつ、それドーピングじゃないのか？一体何飲んだんだよ？」

「んーと、抗うつ剤。」

「ばか——っ！」

乾いた衝撃音が球場にこだました。

※抗うつ剤には副作用として口の渇き、霞み眼、めまい、眠気、便秘などを含むものがあります。用法、用量を守って正しくお使いください

終焉

人の運命は生まれたときにある程度決まっている。いくらでも自分の手で変えられると言う人もいるが、結局与えられ定められた環境から抜け出すことはできない。私はこの国の王女であるが、王女という立場から抜け出すことはできないし、足掻いても無駄なことである。王女というものは本当に退屈でつまらないもので、自由に外出することもできず、友達もない。父は愛してくれはしたが、いつも国の事しか頭になかった。母もやはり立场上毎日忙しくしていた。そんな中、私をずっと支えてくれたのが「彼」だった。

いつものよう付き添いの者と夕食をすまし、私は自室に戻った。城というのは無駄に広く、自室に戻るだけでもかなりの距離がある。しかし、これでも他の国に比べれば小さい部類であるらしい。ようやく自室にたどり着き、ドアを開け部屋に入るとすぐに紅茶の上品な香りが身体を包んだ。今日もこの時間がやってきたな、と私は幸せな気持ちになった。高ぶる気持ちを抑えつつ、私は定位置に座った。彼はそれを確認すると、私のそばに来て紅茶を淹れてくれた。彼は私が小さい頃から私の護衛役として配属された騎士であり、執事である。彼は普段は騎士団長として活躍しており、その実力と人間性を買われ、王である父より私の護衛役に任命された。戦やその報告などで来られないこともあったが、朝と夜はこうしていつも紅茶を淹れてくれた。彼の淹れる紅茶はとても美味しく、なにより彼という時間はとても楽しくて。いつの間にか芽生えていたこの胸の奥にある感情は確かであるけれど、私も幼い頃から帝王学を学んでいた人間であつたため、表に出してはいけな感情であることは理解していた。

ある日、彼は早朝から戦に出て行った。前日

の夜に、大した相手ではないので夕方には戻れると話していたので、朝会えないのは寂しかったけれどなんとか気持ちを整えた。しかし、夕方になつても戻つてこず、私の就寝時刻を過ぎても戻つてこなかった。彼のことを思うと胸が締め付けられ、私の中の彼の大きさを改めて実感した。結局その日はほとんど眠れぬまま夜が明けた。そして、朝になつても戻つてくる気配はなく、不可抗力で考えたくもないシナリオが脳裏を横切った。

彼が戦に赴いて三日後、ようやく情報が入ってきた。彼の軍団は不意打ちを受け、彼を含め生き残りの兵士達は捕虜として捕らえられているとのことだった。彼が生きている、それだけで私は安堵したが、決して状況は芳しくなかった。捕虜として捕らえられているということは、こちらが相手に従わなかった場合彼らの命はない。相手は隣国のあの国で、昔から仲が悪く争いが絶えなかった。こちらが優位の関係にあつたが、今回のことで立場が逆転してしまった。相手側の要求は、私だった。

具体的には何も言つてこなかったが、普通に考えて嫁入りしないか、ということであろう。これを呑んだとしても国の実質的な権限が相手側に移るわけではないだろうし、争いも潰えるはずであろう。苦しむのは私だけで済む。しかし、拒めばまた争いが起き、なにより彼が――。

国の為だとか、国を救いたいだとか、そんな壮大な事ではない。ただ、彼を救いたいから、彼を救えるのは私しかないから。これまでの人生に潤いをもたらしてくれた彼に出来る、精一杯の恩返し。たとえ未来に絶望しなかったとしても、もう彼に会うことは叶わないとしても、彼が生きてさえいてくれれば私はそれでよかった。

翌朝、私は彼と入れ違いで、城を出た。

僕の目に映るもの。 みんなの目に映るもの。

授業が終わり、僕はいつものように友だちの明子と大学を出た。駅までは歩いて二十分。僕達のほかにたくさん歩いている人がいたけれど、三十メートルほど先には一人の小さな老人が体格に似合わない巨大なリュックを背負って歩いていた。その老人は途中で十字路を右に曲がって行つてしまつたが、何となく僕は気になつたので明子に言つた。

「ねえ、さっきのおじいちゃん見た？ あんな大きな荷物どうすると思う？」

しかし、明子の答えは意外であつた。

「え。おじいちゃん？ 目の前にはキモンブルが一組歩いているだけだけど、おじいちゃんなんていなかったよ。」

僕達の前には、見てて恥すかしくなるようなカッブルがでれどと歩いてた。

「いたよ。ちっちゃいのにすこいがかいりリュックを背負つてたじゃん。」

「いなかったよ。…もしかして哲雄、幽霊でも見たんじゃない？」

「えう…そうかな。」

僕は明子の言葉に少しドキツとした。僕は今までにも何度かこういう経験があつたからだ。家族と車で走っている時や、友達と遊びに行つたときなど、僕が見たと書いているのに、家族や友達には見えないと言われ、冗談交じりだつたけど気味悪がられたりしたことが何度もあつた。幽霊とかは信じたくないし、自分にも目の錯覚と言ひ聞かせているけど、やはり自分でも気持ちが悪。

明子は僕が考え込んでいる様子を見て取ると、肩をぽんぽんと軽く叩いて言つた。

「冗談だよ冗談。哲雄は考えすぎだよ。多分私はおしゃべりに集中してたから見えなかつたんじゃない。あまり気にする必要ないよ。…つて何あれ！」

明子は五十メートルほど先にある十字路を指差した。僕は指差された方向を見るが何も見えない。

「ほら、今、超ヤバイのが通り過ぎたじゃん。全身白タイツの男。しかも頭にカウボーイハット。」
彼女はその十字路に向かって駆け出した。彼女の外見は立派な大人なのだが、周りの目にも気にせず、子供のように走つていった。僕もしやうがなく走つて彼女を追ひ、その十字路で辺りを見回すが、やはり何も見えない。

「全身タイツの男、いる？」

僕は息を切らしながら聞いた。明子も肩で息をしながらあたりを見回すが見つからないようだ。

「いない。どこ、行っちゃったんだろ。確かにいたんだけどなあ…わたしも幽霊でも見たのかも。」
彼女は冗談っぽく言つた。行こうか、と僕が言つたが、彼女は何かを思い出して、あつと言つた。「わたし学校に忘れ物しやつた。今日それ持つて帰つて、家でやらないとかなりヤバイんだよね。ごめん。駅の本屋でも待つてくれる。すぐ戻つてくるから。」

「だいじょうぶだよ。ちやうど本屋で買いたい本があつたから。適当に暇つぶしとくよ。」

明子は両手を合わせて、ごめんありがとう、と言つと、もと来た道を走つていった。僕は明子の後姿を見届けると、駅に向かって歩き始めた。

明子が見たのは幽霊だつたのだろうか。そもそも、僕の目に映るものうち、一体どれが他人の目にも映つていると言ひうことが出来るのだろうか。

後ろから何台かの車が来て僕を追ひ越していく。僕の周りには犬の散歩をしているおばあさんや下校中の小学生の集団、立ち話をしている主婦達がいる。

僕の目に映るのは四台の車。犬とおばあさん。

六人の小学生、二人の主婦。少なくとも僕の目には映つているけれど、実は僕にしか見えていない車や人などがあるかもしれない。でも僕は自分が見えているものは他人が見えていてと信じているし、普通、そう信じていてそれが裏切られることはほとんどない。しかし、自分の目に映るものというのは、実は、とてもあやふやで信用ならないものなのかもしれない。

*

*

*

本屋で立ち読みをしていると、明子が来た。

「ごめんごめん。待つたうじやあ行こうか。」

駅は人が特に多い。赤ちゃんとその母親、高校生、サラリーマン、おばあさん等々。僕は明子に聞いた。

「ねえ、あのサラリーマン見える？」

「見えるよ。」

「あの、三人の高校生は？」

「見えるけど…なんで？」

「僕の目に映るものとみんなの目に映るもの…それらがなんか不思議だなと思つて。」

「何、また哲学してんの？」

「まあ、そんな感じ。」

「あつツッキ、快速がちやうど来た。」

僕は、少なくとも僕の目に映つてゐる快速電車に乗つた。明子も普通の顔をして乗り込む。後からも何人かが普通に乗り込んでくる。電車はゆるやかに加速しながら動き出す。

良かった、この電車はみんなの目にも映つてゐるようだ。

ゆけゆけ、霧レンジャー！

俺の名前は井上善太郎。中肉中背。これといった特技は無い。最近の悩みは高校生になる息子良太と会話が續かないこと。——まあ、どこからどう見てもごく普通のサラリーマンだ。

そんな俺にも、家族や同僚には秘密にしている顔がある。何を隠そう、俺は「ロー戦隊『霧レンジャー』」のリーダー『孤高のレッド』として、自己中なポジティブ人間から宇宙を守っているのだ——

「悪い、電車が遅延してー」

遅刻魔の怠惰イエローがお決まりの台詞を言う。もしそれが本当なら、彼と同じ路線を利用している傷心グリーンも遅れているはずだ。

「お前はもう少しブルーを見習えよ。」

「いめんいめん。」

イエローにも多少の罪悪感はあるのが、メンバー最年長アリンブラックの言葉に、頭が上らないようだ。

「本当、時間通り集まる俺らの身にも——」

「つつせえよ、ハブひびきだ。」

ちなみに、俺のポジションはいつもこんな感じ。愛ゆえに、皆俺をいじりたがるんだ。

「……それって今日の敵は？」

マップで雑談を続けること一時間弱。気弱ブルーが申し訳なさをうに切り出した。

「ああ、そうか。忘れていたよ。」

冷めてしんなりとしたポテトを頬張りながら、ブラッシュが答える。

「グリーンに住んでいるアパートがあるだろう」

「ああ、あのボロいアパート？」

「人の住居を何だと思ってるんだ、ハブられ。」

「で、そのボロアパートの隣人が、夜中に大音量で音楽を

聴へらへら」

「そうそう。何せ壁が薄いから、困るんだよ。」

俺がボロというのは駄目で、ブラックならいいのか。隣人のことよりそれが気になる。

「大声で歌ったりもするしさ。しかも、たまに遊びに来るそいつの友人が超オンチでー」

「自分がオンチだと気付いていないポジティブな人なんだね……可愛そうに。」

なぜか俺を見るブルー。意味が分からない。

「まあ、要はそいつに灸を据えりゃいいんだろ？」

「仕切ってんじゃねえよ。」

俺を睨むグリーン。マジ意味分かんない。

「すみません、宅配便です。」

宅配業者に扮して、相手の警戒を解く——我ながら完璧な戦略だ。

「はい、ちょっと待っていて下さい。」

はきはきした声で応じる隣人。ちょろいな。

——宅配便だつて。忙しいから代わりに出てくんねえ？」

——ん、いいよ。

部屋からやり取りが聞こえる。廊下においてこれだけ聞き取れるのだから、やはりボロい。

「今の声……例のオンチな友人？」

「ああ、間違いない。」

イエローとグリーンの話し声が聞こえる。そういえば、なんで俺だけ宅配業者の格好してるんだろっ。

「はい、お待たせしましたあ。」

ハン「片手にドアを開け、出てきた怪獣オンチ。」

「……お前、良太じゃないかー」

怪獣の正体は、可愛い我が一人息子だった。

数秒の間。

「はっつせえ。」

ドアは容赦なく閉められた。

「カエルの子はカエルだね……。」

ブルーが哀れむように呟いた。

虚・移・現

水中にいるかの様な微かな抵抗と、距離感の喪失。それはこの先が現実とかけ離れていることへの証明だ。

ずだだだだだという蛍光灯の叫びだけが静寂を破壊し、私の頭を崩壊させようとする。

引き戸と曇り硝子で囲われるその部屋は一般的には教室と言われる場所だ。蛍光灯の悲鳴はここから聞こえてくる。

ずだだだだだだという蛍光灯の悲鳴に、男の高らかな笑いが調合される。死体だらけになった教室には狂った様

私の一言に男は反応し、緩慢な動作で振り返った。

「どうした？ そんなに不思議か？ ここが貴様だけの世界だ
と
思っていたのか？」

「そうだ。ここはお前の頭の中の世界だ」

私はゆつくりと教室へ入っていく。血赤に染まる床に焦げた天井。

「この世界という共通認識の中には色々な奴等がいてな、
 システム
 貴様の様に世界から外れた欠けた歯車の様な奴等も多くい
 る」

男はびっくりと反応した。この比喩に心当たりでもあるのだろうか。

「普通、そう言った奴等は空想の中に逃げ込むだけで無害なんだが、たまに貴様の様な異分子バグが存在する」

死体の首筋を挟る刃の跡と、火傷の痕。刃は男が握る力
ツターナイフか。

「貴様等の様な異分子はその妄想を世界に押し付けて
異常を起こす。私の仕事は貴様等の様な異分子を取り除く
出取りといったところだな」

男の空想はある程度理解した。もう探査は必要ない。サーチ
ソースコード

「貴様の空想は世界にとっては邪魔物なんだって言っただ。貴様の世界を守りたいならかかってこい！」

ボくのセ界カラ出テイけえええエええエエえ！！！！」

デバック・スタート

虫取りの開始だ。

男は死体の山を蹂躪しつつ走り寄る、単調で直線的な動作。途中、男は死体の一つ的首筋をカッターで切りつけた。

こぼり、と一瞬の硬直の後に血液は溢れ出す。天井近くまで噴き出す鮮血は重力により床に吸い寄せられ、

その過程でその姿を火炎に変える。

炎は火炎弾となり襲いかかる。降り注ぐ死の流星を前に、私は一歩前へ踏み出した。

虚ろな空想は世界法則を移し替え現へと顕現する。

「何をそんなに驚いている？」

私は男の背後から声をかけた。

「貴様の血液が火炎へと変わるといふ空想は現実に変換された」

男は素早く私へと振り返った。その顔は引き曇っている。教室の前方から一瞬で最後尾まで移動したのが信じられないのだろう。

「なら、私の空想が現実に適用しない訳がないだろう？」

魚眼レンズが男を捉える。距離感が狂っていく感覚。

「私は男の目の前にいる」

虚ろな空想は世界法則を移し替え現へと顕現する。

「業務報告、例の男は無事に討ち倒した」

「御苦労。では引き続き次の標的を頼んでいいかな？」

「了解した。次は『嘘を現実に捻じ曲げる力』だったな」

事前に受け取っていた写真にはごく平凡な女子高生。

私は写真をスーツの内ポケットの入れ、次の標的を討つ。

溶け出す空想は終わり、その時へ続く。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	危機感	0 pt	9 位	0 sp
		ゆだんした。あ、「写」すね、と思いきや、ずどお〜ん!! 「超っと」 新しいサイファ―日本語の登場が、今週の表紙でした。 イチオシフレーズ：「超っと」「（笑）」		
02	力のパラドクス	10 pt	2 位	0 sp
		銃の所持問題。みっしり良く書き込まれてます。 ただ、前半はもっとショートカットで論理をつなぎたい。こんな事件があるよお→N R Aの主張はこうさ→だけど、人間てヤツはさ、と。 あとラスト、「理想を理想のまま終わらせてしまうのはひどく勿体ないことのように思えるのは私だけなのだろうか」は、ひどく勿体ない。まだるっこしく言わず、すぱっと切れ味良く終わらせるのが論説文の要諦です。この場合は、「理想を理想のままに終わらせてはならないと強く願う」くらいで良いのでは。 何はともあれ、ずしりと投げ込んだ正統派としての直球が、ばしっと受けとめられての銀メダルでした、おめでとう!!		
		7 pt	5 位	0 sp

03	父はうつ、だから僕はうつ	ノンフィクション？ と思えるほどにリアリティが備わって、重くしっかりと印象を刻み込んで去ります。 特に「やってあげている」ではダメなんだというくだりが、とても残りました。 こういうお話って、どうしても湿度が高い表現に傾きがちなのですが、突き放すくらいに距離を置いて、しずかに語ったそのスタンスが、より読者の心に届く結果につながっていると読みました。
04	食物連鎖？	2 pt 8 位 2 sp 出ましたあ、ウツボカズラ君。 お題の連鎖。おおそう来たかという展開とノリが楽しい。オチもすんと決まって、おあとがよろしいようで。 特別賞：凝り賞 by キャタピー班（さりげない太字の努力に感動！） / Jr. 生まれたで賞 by メタグロス班（選考委員長が対抗意識持ったので）
05	この、うつけもの！	13 pt 1 位 2 sp うつけものに行ったユニークさ 正統派としての論理展開の説得性 毎週毎週さいごに出てくる図々しさ どんなテイストのものを書いてもヒットしてしまう怪物クンと化してきましたね。みんな、「彼女」を倒すんだっっっ!! こほん。 えーと、人気だったフロイスの言葉ですけど、まとめて6行も引用せずに、まずは2．5行→そこから奇矯な行動ぶ

		りへと展開、そのあと 3 . 5 行→自己中心であることについて展開と組み立てたほうが、この言葉自体も活かせたのでは、とちょっとだけ思いました。 特別賞：戦国武賞 by ダンゴ班 / フロイス賞 by Supuratta班（ルイス・フロイスに敬礼。） イチオシフレーズ：「うつけもの！」
06	反則？	3 pt7 位0 sp すこーん、と終わるその2。 へなへなボールの軌跡が目に見えるようなシンプルな記述がGOOD。 ただ、お薬ネタは慎重に。その薬を服用しているかたが読んでも不快にならない配慮は必要かなと思います。（……って、お茶会で作者さんと話したら、そのあたりのバランスはじゅうぶんわきまえておられました。） 青酸カリやクロロホルムは、いくら遊んでいたって構わないのですけれどね。 イチオシフレーズ：「抗うつ剤」
07	終焉	7 pt5 位2 sp 王女さまの悲劇。力作です。でも、設定説明にスペースを使いすぎて、かんじんの悲劇が、ただの事件報道で終わっちゃってる。 紅茶も執事もどうでもよいから、こういうのは1シーンをクローズアップして、しっとりと演じたい。 特別賞：忙しすぎで賞 by 電極と抵抗（？）班（彼のやるべきことは多い……。） / ロミジュリ

		賞 by 女子大班（シェイクスピアっていいよね）
		10 pt 2 位 2 sp
08	僕の目に映るもの、みんなの目に映るもの。	全身タイツは何だったん？ 明子さんのお茶目だったりして。 テツガクしすぎて、すっきり答えは出ないけれど、自分と他人の世界のすれ違いを「目に映る」ものが違うんだという現象に託してまとめた着眼が、おもしろいなあと読みました。 ぎっしり書いたものをきちんと読んでもらえての銀メダル、そしてキモップルが炸裂してのイチオシフローズ大賞、おめでとう!! 特別賞：キモップル賞 by Rocket班（キモップルって始めてきいた！） / Show me by U-utsu班（白タイツすごい） イチオシフローズ：「キモップル」×2 「目の前にはキモップル」 「この電車はみんなの目にも映っているようだ」
		8 pt 4 位 2 sp
09	ゆけゆけ、鬱レンジャー！	あ～あ、かわいそうな「ハブられ」お父さん。 おなじみ戦隊モノの賑やかさに、ちょっと哀愁が加わって、気分はロンリー・クリスマス（何それ？）。そして、これって仲間たちみんなでレッドをはめたんでしょうか？ おかげさまで、一位賞品は、大岡山マックの店長代理さん直送「冷めてしんなりしたポテト」でした。ぱちぱちぱち。 特別賞：賞状が軽い by Totoro班 / テンションですら鬱で賞 by Yahoo!でアニリンブラックを調べ

		たけど出てこなくてorz 班 イチオシフレーズ：「ア ニリンブラック」「ハブ らレッド」
10	虚・移・現	0 pt9 位0 sp バイオレンスと硬質な コンピュータ用語の融合 が、ハヤリモノ風と言 え、じつにいい疾走感。 くっきりと各シーンが際 立って、あかあかと見え てきます。 そしてなんとこいつは オマージュ作品。それが 「お茶会向け」としてお 届けしたゆえんです。嘘 の回の「その時」、空の 回の「空想メルトダウ ン」のはざまに位置する ストーリーとして構想さ れたそう。 くわしくは作者さんコ メントにてどうぞ。